



# 鳥海山麓サステイナブルツーリズム と地域おこし

おなぎ よしえ  
小 棚 美 枝

(由利本荘市地域おこし協力隊)

## 1 由利本荘市について

秋田県の南西部、県内一の面積を誇る由利本荘市は、その約75%を山林が占め、約10%が農地で、宅地はわずか1.8%程度に過ぎず、南側に高く美しい鳥海山、西に日本海、中央を子吉川が流れる自然に恵まれた地域です。

鳥海山は秋田富士または出羽富士とも称され、古来より火山活動を繰り返し、見る場所によって姿がまったく異なる、変化のある複雑な形の山容です。日本海の浜辺から一挙に立ち上った鳥海山は、冬は山間部に大量の雪を降らせます。その雪は、長い年月をかけて地上に湧き出し、川や沢、滝、湿地などの水環境をつくり、また山麓に育つブナ林に溶けた雪が蓄えられて伏流水となって大地や人々の生活を潤します。

古書には「由利」と記され、長く領地争いが

絶えなかった歴史のある戦国のふるさと由利本荘市は、1市7町（本荘市、岩城町、大内町、東由利町、西目町、由利町、矢島町、鳥海町）の合併後も都市と農村がつながり合い、それぞれの地域が個性を活かしながら、SDGsの目標に掲げる持続可能な地域づくりを目指しています。

## 2 活動①～ダムに沈む百宅地域について～

市の中心部から、国道108号線を車で30分程走ると、盆地の矢島地域から地形に高低差のある鳥海地域に入ります。私は2020年4月に鳥海地域に移住して、地域おこし協力隊となりました。活動は鳥海地域の観光資源の調査や発掘をして情報を発信し、観光誘客の企画をするというミッションです。以前、都内の旅行会社で



冬の鳥海山と由利本荘市街(新山公園より)

働いていたこともあって、自然のパワーを感じたり田舎の暮らしを体験できる現地ツアーや、鳥海高原の地域的魅力を発見するサスティナブルツアーを作りたいと思っていました。

そんな中、私は2018年より鳥海ダム建設が始まって、2028年にダムに沈むという百宅地域に興味を持っていました。実際に現地へ行ってみると、ダンプカーの出入りが激しく、美しい山懐に抱かれた自然の移り変わりの様に驚かされました。四方を山々に囲まれた山間盆地で、標高約400mのマタギの村で知られる上百宅、下百宅から、その奥にあるブナ林や袖川溪谷、弘法大師が修行したと伝わる岩窟、鳥海山の噴火により流れ出た法体溶岩がせき止められてできた柱状節理の美しい華ノ木禅など、末広がりです緑起の良い法体の滝のすぐ手前まで、すべてダムに沈みます。国としては自然災害が激甚化しており、子吉川の氾濫を防ぐために整備を早急に進めるという計画なのだろうと思います。

百宅がどういう村だったのか、地元住民の案内で、弘法伝説や地域の特異な狩猟に関する信仰があったことがわかる史跡、お社、秘跡などを訪ねたり、山形県庄内の升田とつながって

いる鳥海山修験の文化や歴史について学びました。また、冬には積雪が3m～4mにもなる閉ざされた自然環境の中で暮らしてきた百宅集落の記憶を語り継ごうと「百宅プロジェクト」という取り組みを行っている「NPO矢島フォーラム」の太田さんに、ガイドの心得を教わったりしています。

実際に百宅プロジェクトにも参加して百宅マイスター養成講座を修了しました。六戸あった村に弘法大師が訪れて、「この村は百戸までは増えても生活が出来る」と言ったという村名の由来があるこの村ですが、百宅の住民が居なくなった後になぜガイドが必要なのかと地元の方々に聞くと、「百宅の民俗が私たちにとって未開の分野であって、そこに社会を活性化させる力がある」との答えが返ってきました。『遠野物語』風にいうと「日本文化、古き日本の民俗を山間村落に見ることができる、百宅に無数の山神山人の伝説あり、願わくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ」という意図です。日本の民俗は、文明が飽和状態に達し、文化的創造が危機的状況にあると訴えるべきだと思います。

消えていく集落、少子高齢化が進む地域、新



百宅マイスターガイド（後列真ん中が私）

型コロナウイルスの蔓延、そんな中何ができるのか、とにかく地域を知るには町を歩きSNSを利用してネットワークメディアに情報を発信するという日々でした。フィールドワークに出ると、歴史に詳しい案内人の先生に指導を受け、2年たつと写真と資料が積みあがっていました。



百宅の山神様



百宅でのフィールドワーク

### 3 活動②～蔓細工でカゴ作り～

協力隊の活動では、地域住民との交流を大切にしたいと思い、クラフトバンドやクルミ皮でカゴを作るワークショップを企画しました。地域のかご編み教室で製作技術を学びながら、伝

統のかご作りに取り組んでいる<sup>ひたね</sup>直根地区の方と一緒にこれまで11回実施しました。

地元の方は「コダシ」と言っているこのカゴは、最近では手作りできる人が少なくなっていました。鳥海地域では私が知る限り二人いますが、若い人はいないという状況で、この技術を一体どうやって伝えていけばよいのだろうと思っていました。

材料は、身近にあるアケビ蔓、クルミ皮、ブドウ蔓などの自然の素材でありエコです。しかし、作ったら自分で使うのみで、売りには出さないため、地元に住んでいる方でさえ材料になる木や草を知らない、作ったことがないという状況でした。こういった貴重な工芸品を商品化して、地域の特産品に育てていきたいと考えています。

カゴ作りは冬の仕事です。11月頃から雪が降り農閑期になると、採取して干しておいた蔓や木の皮をふやかしてから裁断して編んでいます。作ったカゴを持って山に行き、春は山菜、秋はきのこ取りをして、食料を入れて運んだり、肴を買いに行ったりと、このカゴは縄文時代から作られていて今でも生活に欠かせないものです。

雪深いこの地域でカゴを作っていると時間を忘れ、山々をめぐっているような感覚になります。古くなって置いてある暮らしの道具であったカゴ、文化資源は人々の記憶、記録です。民具を通して、目に見えない文化が地域の人々の暮らしとともに見えてきます。

ダムに沈む百宅地域から蔓細工に使った道具が出てきたというので、カゴ作りをしている方から見せていただきました。蔓を割く道具らしいのですが、十字架のようにも見え、カゴ作りをしている時に逃げて山の木にはりつけにされている妖精のようだと思いました。

これもまた、地域の貴重な文化資源です。



クルミ皮採取ワークショップ



クルミ皮のカゴ



蔓を割く道具

#### 4 持続可能な地域に

失ったら二度と取り戻せない里山の景観や文化、環境は、なくなってから大切な宝物だったと気付くことがあるのかもしれませんが。元に戻

すことはできないけれど、見聞きしたこと、体験したことを言葉で伝え、語り継ぐことができれば新しい文化を創ることができるはずです。持続可能な社会とは、そういった人と人との交流から発展して変容していくのでしょうか。

地域循環共生圏とは地域の資源、自分たちの目の前にあるものの可能性をもう一度考え直し、その資源を有効に活用しながら環境・経済・社会をよくしよう、資源を融通し合うネットワークを作っていこうということです。サステナブルツーリズムでは、こういった地域の資源を未来に残していくという地域の持続性を体験できるツアーを企画・実施していきたいと思っています。

自然と共に生きる中で、美しさは人の営みの中にあらわれて、守られます。鳥海山の麓に暮らす人間のおおらかな気質や独立精神に触れて、日本に生きる自身のこれからの在り方と魂の行方を追いたしたいと思います。

#### <担当者から一言>

由利本荘市では令和4年9月1日現在で5名の協力隊が在籍しております。

今回寄稿した小棚隊員のほか、副業(複業)による地方での新たな働き方や暮らし方を実践する「ナリワイづくりプロジェクト」に2名、若者同士の交流を創出し、自然な出会いにちょうどいい場をつくる「アベイバプロジェクト」に2名が配置されており、それぞれ市の課題解決に取り組んでおります。

県内一広い由利本荘市ですが、協力隊員による外からの視点により、新たな魅力を掘り起こしてもらいながら、持続可能な活力あるまちづくりに取り組んでまいります。

(由利本荘市鳥海総合支所 産業建設課  
佐林 祐輔)